

[小浜酒井家史料から(1)]

# 殿様は、白塗りが大好き

## バカ殿ではありません。天守の話



『日本城郭古写真集成』より

この古写真は、若狭小浜城の大手門を明治初年に撮影したものである。

寛永11年(1634)、酒井忠勝は武蔵川越より移ると、小浜城の大規模な改修を開始した。上の写真に見える城は、その酒井忠勝築城の姿を留めている。写真で見ると、櫓よりもはるかに背丈のある松の巨木が、城内に何本も生えていたことがわかる。また、大手門の櫓は板壁の建物で、軒下部分だけが白漆喰で塗籠められていることも看取できる。

ところで、小浜には酒井家に関する史料が多く残されている。それらの中には、忠勝が小浜城築城について出した指示について、具体的に知ることができるものが含まれている。寛永年間という、いまだ戦国期の雰囲気を残していた時期である。その当時の大名が城についてどう考えていたのか、城郭史を考える上でも無視できない。

小浜城と酒井家の史料から、近世初期の城郭を眺めてみよう。

酒井忠勝は、大老・老中を経験するなど、幕府の重職にあった人物である。定府大名ではなかったが、国元にはあまり帰らなかった。そのためか、国元へはいろいろと細かい点にまで、指示を出している。

「鯖之せわた。なる程念を入、塩から二仕越可申候。其元にてよくたんれん仕候ものを高濱へ遣し塩から可申付候事」

小浜は「鯖街道」の起点であるから、鯖の加工品が作られていた。鯖のせわたの塩辛も名物だったのだろうか、わざわざ「たんれん仕候もの(熟練した者)」を派遣して作れと指示している。また、「鮎之鮓(鮎鮓)」もあまり多く江戸に寄越すな、桶で2~3つがよいと指示している。忠勝がこれらの郷土食を好んだというよりは、江戸での交際に若狭近辺の名物が必要になったのであろう。我々が出張の時に、美味いはずは別にしても「玉椿」を持って行くのに似ている。

さて、その忠勝だが、城普請についても結構指示が細かい。具体例を全部のせるわけにはいかないが、彼が気にしている大きなポイントは2つくらいに絞られる。まず1つはお金である。とにかく経済的に造れという。資材や職人についても相場を調べた上で、安い市場から必要な分だけ調達せよと、まるでアメリカのフォード社みたいなことを言っている。そして天守に納められた金銀については、細かに残高を江戸に報告させている。天守の金銀も扱えるのは特定の者だけで、例えば他の家臣には知られないように、納入時には武具と一緒に入れると、カムフラージュする徹底ぶりである。また、その金銀も、相場の動向によって、率の良い市場を選んで交換し、利ざやを稼ぐようにとまでいうのである。財テクも忘れていない。

2つめは、見た目である。次の史料は天守建築に関する部分である。

「何も窓かつこう(格好)よきように可仕候」

「軒瓦のかつこう肝要之事」

「しぶん(鴟吻=鯨)之儀、風つよき所に候間、念を入丈夫につらせ可申候。勿論ゆかミ不申候様かつこうかんやう(肝要)候事」

外見上のポイントは、格好良さが大事らしい。また、破風については、

「天守はふ之儀、此方にて八黒ぬり仕由相談申候へ共、遠くより見へ申間敷候間、白土可仕之由尤候。…」

とあり、黒塗りすなわち漆塗にするよう相談しているらしいが、それでは遠くから見えにくいので白漆喰にすべきであるというのである。天守建築において、破風は装飾である。そういう性格の造作であるからこそ、遠くから見えるような工夫が必要なのである。

破風以外でも、天守の壁塗は凍りつく前の10月15日までに白漆喰まで塗っておけ、それにはいい材料を使え、白漆喰は下塗が完全に乾いてから塗れ、と忠勝は職人顔負けの細かい指示をしているのである。

白く塗って、よく見えること 史料をみるかぎり、小浜城天守では、作事に際して「美白」が求められたようである。

参考；『小浜市史』藩政史料編一

「城踏」；韓国では、閏月に山城や邑城の城壁上を歩くと、1年間足の病にならないという民俗儀礼がある。これをSung Balpkiといい、あえて日本語に訳せば「城踏み」となる。



「城踏」の様子